

「持てるもので」 ～身分不相応ではだめ～

Iサム17：21～50

私たちは与えられるものに感謝をしつつ、1年をスタートしているでしょうか。与えられている家族や友人、環境に感謝をしているでしょうか。周りの人々に感謝ができずに、求めるばかりの人生ではいけません。今は感謝が表せない所から人間関係が段々と希薄になっていっています。そのため、親子であっても愛する事ができず、憎しみあったり、許す事ができない関係になってしまっています。これは自己中心の生き方そのものです。私たちは教会に来ているのですから、そのような生き方を変える決断をしていきましょう。それは私たちが強いられてするものではありません。それは私たちの周りにいる大切な人々のためなのです。周りの人々に変わってほしいのであれば、自分が変わらなければなりません。その故、私たちは自己中心の生き方を変えていきましょう。私たちが変わるには自分と向き合わなければできません。人には見られたくない、隠したい部分から逃げていては変わりません。逃げている限り、成長はありません。成長するには向き合わなければいけません。鋼の包丁を研ぐ時は最初は荒い石ですが、仕上げは堅い石で磨きます。鋼より柔らかい石では研ぐ事はできません。それと同じように私たちも「鉄は鉄によってとがれ、人はその友によってとがれる。（箴言27：17）」ように友によって研がれていきます。それも一瞬で終わるものではありません。長い時間かけて研がれていくのです。始めはなぜ研がれているのか分からない事もありますが、研がれ続けた後に理解できるようになることもあります。今年は自分にとってストレスな事から逃げずに向き合っていくしましょう。私たちはできない事ができるようになってこそ、達成感を感じます。私たちは人前に出ると、普段の姿ではなく、鎧を着て自分を守るようになります。本来の自分を隠し、作り上げた自分を見せてしまいます。そして何か問題があると完全に武装し自己防衛に入ります。それは赤ちゃんに鎧をつけているようなものです。実は鎧の中に隠している心はとてナイーブです。私たちは周りにいる人の心（内面）を知っているからこそ、その人を受け入れ合うことができ、愛し合い仲良くすることができます。本当の姿を知る事ができるから向き合う事もできます。向き合っているのであれば、剣のような鋭い言葉になったとしても、愛しているからこそその言葉として受け入れる事ができます。私たちが鎧を着ているということは、向き合った相手から傷つけられる事が前提となっています。時間はかかりますが、最後まで相手と向き合い、理解し合えれば、鎧を着る必要はありません。しかし向き合わない人が鎧を着て、自分の方法によって短時間で決着をつけようとします。（Iサム17：21～50）私たちは自分の立場に合わない持ち物を持つことや、大きなトラックに乗る事によって自分を大きく見せようとするために運転が変わったりすることなどの身分不相応な事をしてはいけません。こういう事を聖書では「鎧」といっています。自分の立場に合わない方法で物事に立ち向かったり、人と向き合う時に本来の姿で向き合わない事が身分不相応な事です。自分ができる人のように鎧を着て人と向き合ったり、自分を隠して向き合うことを今まで教えられてきたかもしれません。教会はその鎧を脱ぎ、本来の自分と向き合うのですから、嫌かもしれません。アダムとエバが罪を犯してから恥を隠すようになりました。私たちも自分の恥を隠すようになってしまっています。それは相手が自分を傷つけてくると思っています。それは自分が同じように周りの人の恥をみて裁いたり、さげすんだり相手には聞こえなくても、心の中で傷つけているからです。そのため、人は自然に着飾るようになり、持っていないものを持っているかのように振舞うようになりました。今年は向き合うことがテーマです。私たちは鎧を着たままで向き合うことはできます。口では良いことを伝えますが、心では違うことを思っていることをよくしてしまいます。本当の心は相手を思っただけの優しい言葉をかけようとしてします。しかし相手と向き合った時に私たちは相手からの反応を恐れて、鎧を脱いで向き合うことをしません。ゴリアテという大男に紅顔の美少年であったダビデが戦いを挑んでいきます。それも5つのなめらかな石で戦いました。ゴリアテとは「晃輝」という意味です。ペリシテ人にとってはゴリアテは晃輝な存在でした。私たちは目の前に大きな問題が立ちのぼると恐れてしまい、鎧を着て虚勢をはって立ち向かっていこうとします。ダビデは自分に問題が起こった時にいつもどうするのかを知っていました。ダビデは自分の大事にしている羊に対して獣が来た時に、逃げずに立ち向かっていきました。たとえ、奪われたとしても追いかけていき、何とかして取り戻そうとしました。その時に使った方法が今日読んだ聖書にも出てきますが、5つの石でした。この石は土台という意味があります。すなわち礎石とした御言葉を指しています。ダビデはその時、その時で違っていますが、御言葉は土台として立ち向かいました。散弾銃のように数によって闘うことをしませんでした。ゴリアテの急所に1つの石（御言葉）を一発で勝利しました。ダビデに与えられた方法で、虚勢も張らずに勝利しました。ダビデはいつも神と交わることをしていました。エラの谷というところは丘陵地帯のため川にあるようななめらかな石というはありませんでした。しかしダビデは羊飼いをしながら、いつ敵が来てもいいように準備をしていました。私たちが間違った判断をしないために毎日御言葉を読み蓄えていることです。心にちゃんと土台があるということなのです。私たちの人生の中でしっかりと土台を学ぶ事ができるのであれば、よいのですが、反対に鎧を着る事ばかり教えられ、学んできました。その中で、相手の心を変えるような言葉が備わっているかということとそうではありません。だから私たちは知識を蓄えようとしてしまいます。私たちは重くて動き辛い鎧を着ようとしていたり、相手に届かない剣を使おうとしています。私たちは使用できない武器を使おうとして、失敗し自分を傷つけるようなことになってしまいます。エラの谷のエラとは樅（強い木）という意味があります。地中深く根がはり、倒れません。ダビデはいつも強いことができたのは神の力によってでした。ダビデはこの戦いは剣によって戦うのではなく、主の戦いであると言っています。（イザヤ61：3）私たちは揺れ動く葦から義の樅の木に変わらなければなりません。目の前に問題が起こると焦って鎧をきて対応するのはなく、樅の木のように、ペテロの名である岩のように強くならなければなりません。いくら鎧をきたとしても急所が露になっているのであれば意味がありません。鎧を磨いて光り輝くようにしても意味がありません。内側から輝く者へとならなければいけません。私たちは①向き合うときに鎧を脱ぎましょう（Iサム17：38～40）人と向き合って話している時、自分を正当化するような鎧を着ては向き合うことはできません。私たちは本来の素直な気持ちを知っています。私たちの心には人を傷つけるような思いはないはずですが、しかし喧嘩すると、思ってもないことを言って傷つけてしまいます。目の前にゴリアテが出てきたイスラエルと同じで自力でがんばろうとしてしまっています。私たちは剣を用意する前に鎧をきていなければ、剣も必要ありません。相手と向き合う時、遠いから剣などの道具が必要になり、傷つけるのです。向き合うとはもっと近くです。自分の心と相手の心に近くなれば、お互いに傷つけることはありません。人が真剣に向き合って話し合ったら解決できない問題はあります。ところが逃げてしまったりそこで終わってしまいます。思い出だけで、心に痛みを覚えます。私たちはその都度、向き合うべきです。②向き合う時、本来の姿でしましょう（Iサム17：45～47）私たちは目に見えるものとの戦いだけではありません。たとえ相手が立ち向かってきたとしてもそれは相手の本当の姿ではありません。この戦いは主の戦いです。ペリシテ人はセムの子孫でした。イスラエルとは元々兄弟です。自分の本当の姿を知るところからしましょう。私たちは強がったり、言い訳したりしないで本当の姿で接していきましょう。（使徒3：6）「金銀は私にはない。しかし、私にあるものを上げよう。ナザレのイエス・キリストの名によって、歩きなさい」とペテロは語り、癒しました。自分にはない方法で人を癒すとしても人は変わる事ができません。着飾っても強がっても立派なように振舞ってもダメです。私のありのままの姿で、且つ相手の本来の姿を見る事が私たちにとって大事なことです。悪く思うこと以上にそれを隠していることの方がもっと悪いことです。問題を遠のけているだけです。向き合うことが大変ですが、本来の姿で向き合っていくしましょう。③向きあるために神の武具を身に着けるようにいっています。私たちは丸裸で接するものではありません。神の武具が必要で（エペソ6：11～18）神の武具はⅠ真理の帯を腰につけます。私たちの土台は偽りではなく真実であるようにいっています。Ⅱ正義の胸当てをつける。自分の行動に説明がつけられるようにしていきます。そして自分に問いかけてながら進んでいきましょう。Ⅲ足には平和の福音の備えをはきましよう。私たちは争いのために出ていくではありません。私たちは平和のために出て行きなさいと言われていきます。Ⅳ信仰の大盾をもつ。相手が私を傷つけない唯一の方法は私が信じるということです。信じてもらえないから傷つけるのです。相手を信じる事から逃げてはいけません。距離をおかず、向き合っていくしましょう。信じてもらえるから、変わろうとするのです。Ⅴ救いのかぶとをかぶる。私たちは必ず助かります。Ⅵ御霊の剣を持つ。人を傷つける言葉を発するのではなく、人が変わる言葉を選びました。Ⅶ忍耐の限り祈りましよう。相手が良くなるように祈るのです。私たちは偽りの聞こえの良い言葉を使っているは何も変わりません。その相手にとって必要な言葉を急所に投げ込みましよう。私たちの人間関係はこのようにならなければいけません。私たちはまず自ら着ている鎧を脱ぎましよう。そして自分と向き合い、何のために私が存在しているのかを考えましよう。それが分かれば私たちはただ進むだけです。私たちは神と向き合いましよう。求めるから与えられ、探すから見つかると、たたくから開かれるのです。私たちはそこから逃げずに言い訳などしないで、神の元に素直に出て行き、愛されている事を知り、受け取っていきましょう。私たちは愛されている事を知ましよう。それがないと愛することができません。私たちはただ、自分の鎧を捨て、自分に与えられているよいものを用いて神の素晴らしさを表していきましょう。（要約者：平澤一浩）

